

ゆるいスタンスで三十五年

同人誌を立ち上げる時は、大抵その誌名に『文学的志』のような強い思いを込めるものだ。ところが、一九八八年に創刊された「朝」という誌名には意味がない。つまり、何物にも規定されず、ただただ文学が好きで、書くことが好きな人が集まって、冊子を出そうという、当世風に言えば、ゆるいスタンスで始まった。

発起人は、同人誌「文芸首都」や「公園」で中堅を担っていた宇尾房子氏とその同人仲間。そして千葉県浦安図書館館長の竹内紀吉氏だった。

それから月一回、浦安図書館の会議室や浦安の公民館で会を重ね、年に一回か、三年に二回のスローテンポで、細々と同人誌を出し続けた。

原稿の締め切りは、その都度決めていたし、『朝』時間などという言葉がまかり通って、原稿が集まるまで、一週間から三週間くらいは、平気で延長された。

それでも何とか冊子を出し続けられたのは、月一回の会合と、そのあとの飲み会で、文学や政治について熱く語り合い、時には一泊旅行へ行ったりすることがこの上もなく

楽しかったからに違いない。

そんな中で、何人かの人が入会し、退会し、そして何人もの人が、鬼籍に入ってしまった。そのたびに追悼号を出したが、

「最近では、『朝』に追悼文しか書いていない」

などと、悲しいことを言う同人もいた。

発起人の一人、竹内紀吉氏が亡くなると、会合は東京の喫茶店に移され、その後ネットで調べた会議室などを、難民のように転々として、最近では飯田橋のルノアール会議室に落ち着いている。

その間、同人の吉住侑子さん、千田佳代さんが相次いで

小島信夫賞を受賞するという快挙もあった。

その後、会の要だった宇尾房子氏までもが亡くなり、会の存続が危ぶまれたが、ゆるいスタンスゆえに、発行人や編集人をめぐってもめることもなく、元刑事という変わり種の高橋俊輔氏が発行人と編集人を引き受けてくれた。さらに二〇二〇年、体調を崩した高橋氏が休会し、発行人村上玄一氏と編集人中村桂子にバトンが渡された。

いくつかの出版社で編集の経験があり、日大芸術学部研究所の教授をしていた村上玄一氏が入会してから、会の構成員が一変した。村上氏がゼミで教えていた若者が、次々と入会してきたのだ。二十代、三十代の会社員、四十代の子育て中の主婦、そして何と現役の女子大生まで、上は八十四歳から下は二十一歳という幅広い年齢層を抱える会となった。若者達が、廃れつつある紙文化とどう向き合っていくのか、今後が期待される。

因みに、今回同人雑誌優秀賞に選ばれた天野いずみさんは、「朝」の発起人だった宇尾房子氏の娘さんである。彼女は理系女子だが、宇尾房子さんの追悼文を書いてもらった縁で、「朝」に入会した。奇縁である。

新体制で出すことになった四十二号の編集会議の時、月号何かテーマを決めて、小説やエッセイを書いたらどうかという案が出され、承認された。

時は二〇二〇年。会はコロナで休会続きだったが、冊子



「朝」同人合評会 2022年5月15日 飯田橋ルノアールにて



だけは出そうと、テーマは必然的に「コロナ禍」と決まった。

ところが、「それぞれのコロナ禍」というエッセイもそれ以外に集まった作品も、それこそコロナ禍のせいかもしれない短めで、それはホチキスで止められるほどの薄っぺらさだった。

そんな時、助っ人が現れた。以前編集人と同じ同人誌に属していたAさんから、読んでほしいと原稿用紙百五十枚の小説が送られてきたのだ。それは大船渡出身の彼女が、東日本大震災の津波で、四人もの肉親を亡くした鎮魂歌だった。テニヲハを超越した、破天荒ともいえる独特の文体には、妖しい魅力があった。こういった作品を取り上げ、発表するのが、同人誌の一つの役割ではないか？ わたしは迷わずAさんに連絡し、「朝」に寄稿してもらおうことにした。かくして、四十二号の特集は「それぞれのコロナ禍・東日本大震災から十年」となった。

そして不思議なことに、四十三号の準備に取りかかっていたわたしの元に、またしても原稿が届いた。それは、大学の文芸サークルの先輩Kさんからの「三島由紀夫論」だった。彼は、卒業してから文学とは無関係な仕事をしてきたが、文学が好きで、文学論が好きで、ずっと三島由紀夫に拘っていた。その三島由紀夫論の行間には、これだけは書いておきたいという気迫がみなぎっていて、圧倒され

た。

その瞬間、Aさんの時にはまだ曖昧だったわたしの編集人としての思いは、同人でなくてもいい、一生に一度、どうしても書いておきたいという作品を積極的に載せていうという、強い意志に変わった。さらにKさんの論文に触発されてYさんが書いた三島由紀夫論も同時に寄稿してもらうことになり、それは相乗効果を生んで、四十三号の特集は「コロナ禍ふたたび・三島由紀夫論二編」と決まった。

この同人以外からの寄稿という企画がいつまで続くかは不明だが、同人誌の一つの在り方として、その方向性は間違っていないと思っている。

(編集人・中村桂子)

朝

朝の会

〒196-0021

東京都昭高市武蔵野三丁目三・四

村上方

TEL 042・848・2745

122